

藥劑器具

井玄篤ヲ會主トス、外ニ助手三名アリ、畢テ其總目錄一冊ヲ製シ、國守治好公ノ一覽ニ供ス。天保三年九月、第二回藥品會ヲ執行ス、監訂會主前ノ如ク、助手五名ヲ置ク、國守齊承公親ラ此會ニ臨マル、天保十三年八月、第三回藥品會ヲ執行ス、監訂ハ學監妻木敬齋、考訂ハ都講細井玄篤ニシテ、助手八名ヲ命ズ、國守第二子楷五郎公此會ニ臨マル、○中維新前ニ至ル迄保續ス、

〔延喜式三十七〕寮家儲物

稱。一箇藥斗一口藥升一口鐵臼十口鐵杵十枚鐵匕五枚藥刀六枚漆中取案一脚藥殿承塵橡繩幔

一條、長三丈十幅、行幸儲橡口幕一條、紺布幕一條、並隨破損、申省請替、

〔尺素往來〕藥盤、藥剪、藥研、藥臼、藥銚、藥篩、砂鉢、雷槌等、定御用意候哉、

〔下學集下〕藥鐘、藥器

〔撮壤集中〕藥器、藥研

〔雍州府志七〕藥罐、以銅製之、今造諸品物、然元出自煎藥器、故總號藥罐屋、

〔倭訓栞中〕くすりばこ、類聚雜要に、藥宮入物有四合、一合伽梨勒、一合檳榔子、一合紅雪、一合紫雪と見え、河海寢殿の裝束、二階には置藥子匣、其下階藥匣と見えたり、今醫家にいふは、藥籠也、

〔源氏物語三十四〕かうご、くすりのはこ、御すゞり、ゆするつき、か、げのはこなどやうの物、うちうちきよらをつくし給へり、

〔玉海〕治承二年十月晦日己未、良通爲春日祭使發向、○中手振十二人、○中近衛允武國、○中紫褐色

濃蘇芳也、青末濃袴、青單張半臂下襲、蘇芳打拍、青單衣、細花鳥尾冠、藁脛巾、付藥袋、其緒青革也、普通

不損朽也、府者所申也、而此藥袋、鞍之具也、仍不能改直之、唐

〔運步色葉集屋〕藥籠

〔易林本節用集也〕藥籠

〔器財〕藥籠

〔器財〕藥籠